月刊
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあん
4
<EKUTEBIAN VOL.10 APRIL 1992-EKUTEBIAN>
まい あーと■アクリル画
「I can see for miles」by鴨下典明

THREE O'CLOCK STORY

スリー・オクロック・ストーリー

IN TACHIKAWA

ダックワーズはプルミエール

（一番町TEL31-4835）

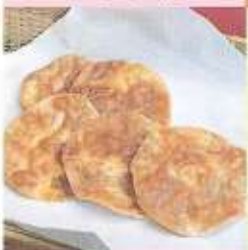
店長の遠山さんは銀座の名門マキシムドパリで修行。フランスのダックワーズ地方のお菓子がそのまま名前に。アーモンドプードルと粉糖をメインにしたもので、口当りがソフト。

ソース味の手焼き煎餅は信濃屋

（富士見町TEL24-4708）

手間がかかるので、まず、他のお煎餅屋さんにないのが、このソース味の手焼き煎餅。生ける美味しさ。俳優の小沢昭一さんもここをご愛用。

手焼き〃ぬれせん〃は雷神堂

（柴崎町TEL28-2249）

あれっ？噛んでみてもパリッとしない、今までの煎餅の予想を裏切る噛み心地がかえって新鮮で人気。焼き立てを熱いうちに乾燥させないで、そのままパック。酒のつまみにもいい。

数ある立川のお菓子の中から、今とってもユニークな味を厳選。おやつが一層楽しくなるような、また、おもてなしにも、新鮮でいい時間を。
えくてびあんは、こう言っているけど、私はこっちの方が美味しいと思うの。など、など。そんな会話もしながらブツブツと論争するもよし。

おこじゅは紀の国屋

（錦町TEL25-6555）

“おこじゅ”とは多摩のむかし言葉で三時のおやつの意味とか。
本場の黒糖と純粋蜂蜜で独特な製法により焼き上げたソフトなお菓子。皮はどら焼きよりも柔らかい。

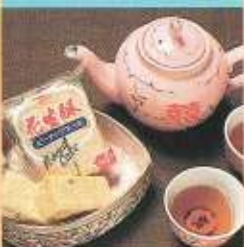
フェナンシェはエミリーフローゲ

（曙町TEL27-4138）

バターとアーモンドの風味がきいて軽い焼き上がりなのでつい手が伸びる。フェナンシェとは、形が金塊に似ていることから、資産家という意味。資産家になった気分をパクリ…

ピーナツケーキは泰平産業

（高松町TEL24-2896）

ピーナツの風味が口いっぱいに広がるケーキ
これにジャスミンティーがあればおもてなしにも新鮮さが一層広がる

うぐいすソフトは二木のパン

（曙町TEL22-2278）

パンの香ばしさと、うぐいすの味が、うずまき状にブレンドされたのが、このうぐいすソフト。近所のOLのお茶受けに人気。3時の焼き立てには3時の気分をそそる。

司会者、立川市文化協会理事
石井幸夫さん

助言者、宇都宮大学助教授
瀬沼克彰さん

パネラーの合唱連盟会長
林みち子さん

パネラーのこんぴら橋会館管理運営委員長
柴　俊男さん

パネラーの劇団「始発駅」代表
島田浩子さん

パネラーの立川市教育長
小山祐三さん

パネラーの文化協会副会長
中村唯一さん

たまにゃ 立川文化を語ろうや

立川に文化協会ができて丸一年。紆余曲折のなかから生れた協会だが、まだまだ考えるべきテーマは山ほどある。地域文化とは何か。立川固有の文化をどう育ててゆくのか——。

去る3月7日、市民会館の壇上には助言者に瀬沼克彰氏を迎え、日頃から文化活動の中心として市民からの信望あつい6人のパネラーが熱い視線で、「立川文化」を語った。

●基調講演

助言者である宇都宮大学助教授、瀬沼克彰さんは「文化の定義は、人間が作り出したもの全て、人間が作り出したもので価値の高いもの等、三百もあり、形態としては、見る、読むことの享受型・する、合唱をする等の参加型・作り出すことの創造型の三つがあり、裾野を広げるにはまず享受型文化が必要であるが、早く享受型を卒業し、参加型へとアップするべきである」と、方向に物差しを当てた。そして、文化を向上させる要因として、①場の制度②仲間③情報④リーダー・先生があり、その地域文化を作る主役は、制度や行政ではなく私たち市民であることを、強く提示された。

●各パネラーから

・中村唯一文化協会副会長は、文化協会設立の実体を語り場内の共感を得た。

・合唱連盟会長、林みち子さんは、手づくりの自分たちの歌った歌で切符を売った時の感動。そして、スポンサーがついてお母さんだけの優しいコンサートが成功した体験をお話しされ、専門家でないお母さん、誰でもできる合唱の素晴らしさを熱く語った。

・柴俊男、こんぴら橋会館管理運営委員長は、地域文化会、学教施設の課題を文化活動補助金のことも踏まえながら、鋭く解決策を提示された。

・文化施設利用者としては、公民館友の会、劇団「始発駅」代表の島田浩子さんの言葉。「百人ぐらい入れるサロン的な劇場を手頃な使用料でお借りできれば、そこから立川で立川の文化を耕していきたい」

・小山祐三、立川市教育長は、「今までの文化は教育的なものとして捉えていたが、最近は生活全般の中に文化があるとする見方を行政もしているので主体は主権者である市民であり、市としては市民が活動しやすい場をつくることにある。また、職員も行政の文化化を目指し啓発し、具体的課題を検討会を重ね、努めて進めていることを語った。行政の立場から、何かできることはないかというような提示であった。

＊会場からも、立川固有の文化を掴み、立川が日本へ世界へ伸びゆくには等のレベルの高い話題も飛び交い、気がつくと、充実のうちに2時間が終っていた。会場を去る時の胸も高揚していた。（司会：若葉町文化会理事、石井幸夫氏）

第二回『頌の会』は 文学鑑賞の朗読会です

「頌の会」第一回目は、動物写真家の久田雅夫さん（栄町）を迎えて昨年夏に行いましたが、今回は文学賞に輝く二人の作家を称え、その作品を俳優、小林恭治さんの朗読によって、じっくりとあじわいます。二人の作家は森　忠明さん（『ホーン岬まで』により野間児童文芸賞、曙町）と清水たみ子さん（『かたつむりの詩』により赤い鳥文学賞、若葉町）です。
〈問合せ・えくてびあん編集工房28−0082へ〉

立川トピックス

三小、学級新聞で『三冠王』

三小は、4年3組の32名の生徒たち。64の瞳に映った日常の出来事を見事に新聞に収め、それが日本一に。それも朝日小学生新聞賞、毎日小学生新聞優秀賞に東京都小中学校PTA新聞コンクール小学生の部入選と三冠を制した。「他の作品には、これ小学生が作ったの？と、びっくりするぐらいうまいのもありましたが、うちはクラスの雰囲気が伝わるような新聞でありたいと思ってました」と担任の牧野先生。通算62号の新聞は生徒の未来に勇気と自信を与えたことだろう。

地域活動団体・個人表彰行われる

2月29日(土)立川市市民会館小ホールにて、平成三年度立川市地域文化振興財団文化・スポーツ・地域活動表彰が行われた。文化・芸術奨励賞、スポーツ奨励賞、コミュニティ1団体表彰、親切運動推進と四部門に亘り審査。馬場ばやしを後世に伝えるべく、その実践指導を続ける加藤光吉さん（柴崎町）、毎朝新聞配達の傍ら柏町団地の階段灯668世帯分を消し歩いていた横内朝厚さん等が表彰された。最後に表彰者代表で、童謡作家である清水たみ子さん（若葉町）が謝辞を述べた。

立川クイズ

先月は立川で最も広い町について、ちょっとおたずねしてみましたが、正解は西砂町です。その面積は約三・㎢平方キロメートル、ここだけで市全体のおよそ十分の一を占めております。ほんのサービスまでに各町を広い順にいいますと、西砂、泉、砂川、上砂、緑、富士見、幸、一番、栄、錦、柴崎、柏、若葉、曙、高松、羽衣となっております。

では、この中にどれぐらいの人が住んでいるかと申しますと、現在およそ十五万四千人。それぞれの町の人口は広さに関係なく実にまちまちですが、平成四年三月一日現在で一番多いのは富士見町の一八〇五八人です。

そこで今月のクイズです。16ある町の中で一番人口が少ないのはどこでしょう。そして、その数はおよそどれぐらいでしょうか。

表紙は語る

まい・あーと「I can see for miles」by 鴨下典明

今回の作品「I can see for miles」は生きものの目を表現したもの。あちこちから見つめられている感じがしてきてどこか不思議です。

これはWILL50人展に出品されていた作品ですが、タイトルは、ザ・フーのヒット曲の題名から取ったもので、「何マイルでも見通せちゃう」という意味。そこからもわかるように、作者の鴨下典明さんは、音楽も好き。絵も音楽を聴きながら。アメリカのテレビアニメの郷愁を感じ、オマージュ（讃辞）を捧げたという意味あいのあっけらかんとした絵を描きたいという。現代童画会会員でもある。

4月16日〜28日(土・日は休館)10時〜5時立川のたましんギャラリーにて個展開催。また、ひき続き、世田谷美術館区民ギャラリーのグループ展にも出品。本物の前に立つ時、現実を越えた鴨下ワールドが、一層見えてくることだろう。その時また、向こうから見られているのかもしれない。

ことわざ問答㉕

漢字一字挿入せよ

石が流れて
□の葉が沈む

蟻の□より
堤の崩れ

ことわざ問答 答

石が流れて木の葉が沈む
物事がさかさまになるたとえを云う。悪人栄えて善人滅びる。あるいは、西から日がでる。

蟻の穴より堤の崩れ
わずかな不注意や油断から、思わぬ大事を招くこと。蟻の一穴、天下の破れ。油断大敵。

真如苑だより

「激動の時代」を反映してか、気温のほうも寒暖の差が激しく、三寒四温という歩調ではありませんでした。「一輪ごとの暖かさ」を通り越して一気に満開になったりもして。これも「時代」なのでしょうか。皆さまがお越しくださる日は、きっと「爛漫」にふさわしい日和にちがいありません。

■日時　4月15日(水)　2時〜4時
■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

東風

流行する前に「バブル＝泡」と知っていた人がどのくらいいたであろうか。ましてや、その綴りがbubbleと知る人は英語の素養がよほどあるにちがいない。当工房に知る者は誰もいなくて、英和辞典でbableを探したが出てこない。情けないなあ。だが、その字引きにも「バブルがはじける」というイディオムは出ていなかった◆バブルとくれば、はじけると続く。バブルがはじける。これも、流行語になってしまった。が、どういう状態を云っているのか正確に表現できる人はそう多くはないのではないか◆「激動の時代」もそれに似ている。なにが激動なんだか、よくわからなくても激動。激動と云っているほうが話のおさまりがよいのであろう。考えてみれば人類の歴史は激動の連続であったが「激動」という言葉がはやる以前にはあまり激動と云わなくても済んでいた。それにしても、バブルや激動というような「時代の言葉」を操っているのは一体、誰なのだろうか◆人口に膾炙して、なおかつ衰えをみせない言葉に「文化」がある。文化鍋、文化住宅にはじまって日本人はしきりに「文化」に憧れた。だが、その実態を見通している人には、なかなか会えない。ま、「文化の日」まではまだ半年以上も間があるので、当工房もゆっくりと考えてみたい。休むに似たり、かな◆しばらくは　入日まばゆき　えくてびあん

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

（編集）小川知子　隅川　理　中村絵里　原田悦子　半沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　杉川一己　本多　修

月刊えくてびあん　第93号
平成四年四月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町1−3−37−103
磐城ビル3F　〒190
電話　〇四二五(28)0082
FAX　〇四二五(28)1297
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

私の傑作選

NICE SHOT!

NO.9

誰のアルバムにもキラリッと光る一枚がある。
撮れた！と思った。シャッターが軽い。

山崎健一さん
（若葉町1丁目）
愛機➡ニコン・ニューFM2
■こいのぼり

小川輝一さん
（高松町3丁目）
愛機➡ニコンF-801
■南禅寺の桜